

第2章 「成熟」社会における個人の〈成熟〉

— ルーマン社会化論の視点 —

岩見和彦

1. はじめに

成熟と成長とは異なる。成長は、誕生—成長—衰退（老化）—死という、生のリニアな過程のなかにその一フェイズとして位置づけられる。人間のばあいは、ほとんどすべての社会で、この生き物としての成長（身体とその能力の成長）の過程にさらに子どもと大人という区分が重ね描きされている。生物学的な成長の区別だけではなく、社会的な承認／未承認という規範的な区別が、ひととしての生の過程のなかに挿し込まれるということである。その承認はふつう「成人儀礼」というかたちで社会的にとりおこなわれる。その時期についてはかつては多くの社会で十二歳から十五歳あたりに設定されてきたが、現代のように二十歳に設定されもする。そのかぎりではそこには文化の恣意性が入り込んでいる。が、成熟／未熟というのはそうした大人／子どもの区別なのではない。それはさらにその上に重ね描きされる価値的な区別である。だから、未熟なままで大人になる者もいるし、幼くしてすでに成熟している者もいる。（鷲田 2003 : 184）

生き物としての人の成長、「大人である」ことの社会的承認、成熟という価値の付与。それらは相互に微妙に絡み合いながらも、それぞれの文脈に応じて人の変容の何かを語り、説明しようとする。このうち前の二つはいくつかの指標をもって「客観的に」指し示すことが可能であるが、成熟は、それらを土台としつつも、さらに重ね描きされるいわば「余剰」である。にもかかわらず、この語は人間的生の意味を考えるうえで、なにか大事なことを語ろうとしている。

成熟の「熟」は、もともと「よく煮る」の意で、そこからうれる（熟れる）、なれる（熟れる）、しあがる（仕上がる）などの意味にも用いられるようになった（白川 2003 : 293）。そして「成熟」は、一般的には、穀物や果実などが十分にみのること、人間の体や心が十分に成育することと説明されている（広辞苑）。「よく」や「十分に」という言葉は、「いまだ～ない」状態が時間概念を介して区別されており、成熟が未熟／成熟の差異として成

立していることは明らかである（経験則に基づく時間尺度を適用すれば、早熟・晩熟といった見方も可能になる）。言うまでもなく、時間的変容と無縁なものは一切ない。したがってこの成熟という言葉は、「よく」「十分」の極みとしての、ある種の経験的に予期可能な完成の状態、極相やピークに達した状態をマークする有用な概念として、他の事象にも広く応用可能となる。たとえば「成熟社会」（D. ガボール）、組織の「成熟度」、「技術が未熟」などというように、社会や組織、技術にも援用されたりもする。完成／未完成の差異をもとに、完成を果てしなく信奉する近代的な「進歩」概念と親和的であることも、関係してのことなのだが。

ここでの課題は、しかし、人間の生をめぐる意味付けの一つとしてこの成熟概念を取り上げることである。とりわけ現代社会論の文脈においてこの問題を考察する場合、もっとも重要になるのは、「個人と社会」の問題をどう捉えるかであって、その理論的視点を明確にしておくことであろう。というのも、たとえば、人間の成熟と社会の成熟を渾然として論じることは、両者を同一視する素朴な理想論を無限に産出するだけに終始してしまうだろうからである。

本稿では、この「個人と社会」問題をN. ルーマンによって提示された社会システム論の理論的枠組みに依拠しつつ、主に社会化論の視点から考察する。その核心は、人間の心も、社会の様々な機能次元にみられる関わりの様態も、一つのシステムとして、それぞれがそれぞれの「環境」と境界付けられた独自の存在であって、そのシステムの論理（比喩的に言えばシステムの生理）にしたがって自らで自らを創出している、という見方である。冒頭の文をこの観点に立って見るなら、生物学的な成長は生体システム、大人／子どもは社会システム、成熟／未熟は心的システムにかかわるものだ、とほぼ言い換えることができる。つまり、生物学的な成長は知識システム（医学）によって規定され、大人として承認するかどうかは社会システム（たとえば経済システム・法システム）が決定し、自らを成熟した人間とみなすか否かは心的システム（意識システム）の営みである、というふう

に。

成熟概念がたちあがる場なりシステムとして、まずは人間の意識（心的システム）を考えることで、今日の社会的現実の多層的な混迷を、成熟というキーワードのもとに解読しようというのが、小論の狙いとすところである。しかしこのような見方に行き着くには、その前にいくつかの成熟言説について整理をしておかなければならない。以下は「現代社会において心的システムの成熟は可能か」を考えるための序論的試みである。

2. 社会の成熟／個人の未熟

個人の成熟と社会の成熟とは異なり、さまざまな未成熟な個人が生きていけるのは、その社会が成熟しているからではないだろうか。社会が未成熟な状態であれば、未成熟な個人は切り捨てられて、生きていけない。逆に、未成熟な大人でも生きていける今日の情報社会は、皮肉なことに成熟した社会のはずである。だからこそ、大人というものの価値についてのさまざまな混乱が起こっているのである。（奥野 2003：77-8）

生物としての人間は、誕生—成長—衰退（老化）—死という過程を生きる点で、今も昔も変わりがない。しかし、いわゆる文明の発達はその人の生を変えてきた。文明の効果を単純に豊かさと便利さに求めるなら、間違いなくそれを増大させてきたのである。ひるがえって、文明がまだ発達していなかった時代を想像すると、人は生きるために必要な営みのほとんどすべてを、協同の形をとりながらも自らがこなさなければならなかった。

この状態を「社会の未熟／人の成熟」と言い表すなら、近代社会の到来は、「社会の成熟／個人の成熟」への移行として考えることができよう。近代化を「個人化」と同義と考える議論（Beck 1996=1998、Bauman 2000=2001）に明らかのように、近代化の過程が共同体、とりわけ村落共同体の解体による「個人」の析出とともにあったことはいうまでもない。そして、そこでは文明貧しき人を啓蒙し、新しい理想社会の仕組とともに生きることのできる善き市民・国民にすると同時に、主体性、セルフ・アイデンティティといった言葉に象徴される、存在のかけがえのなさを自らの生の実践において追求することが要請された。近代社会は、「社会も個人も成熟する」ことを「大きな物語」の前提としていたのである。

近代の人々は豊かで便利な文明を希求してきた。科学や技術、様々な社会制度を生み出しては、人はそのプラスの側面を享受し、ますます全体社会に依存することで暮らしの構造化を図り、それによって豊かさと便利さを手に入れてきた。少なくとも「進歩」の観念は、こうして人々の心に浸透していったのである。しかし、こういった「社会も個人も成熟する」という初期近代の「夢」は、やはり夢でしかなかった。

かつて生きるためにしなければならなかった営みの多くは、より広範化・流動化する高度な社会的分業の網の目に依存し、生活に必要なあらゆる財の調達には巨大な市場や制度を通して購入・調達することで、実際には過剰な依存を前提にした生の形へと編み上げられ

ていく。個人の社会生活が複雑性と不透明性に覆われるとき、個人の成熟は、自らの私的世界にその実現の場を求めようとする。端的に言えば、「細分化された労働／自己実現としての消費（文化的欲望の充足）」、という構図が支配的になっているのが現代なのである。この私的な成熟は、しかし、初期近代の理念的なありようとは違って、社会の成熟とは切れたところで行われる偏頗な成熟、いや本来的には未熟とみなすものでしかないのではないか。こうした言説とともに、後期近代における成熟図式は、「社会は成熟／個人は未熟」として描かれることになり、現代社会で起こる様々な人間現象を捉える時の認識枠組みとしても流布しているのである。「幼児化の時代」「動物化するポストモダン」「ケータイを持ったサル」といった物言いで。

ここで試みた、人（個人）と社会、成熟と未熟との単純な組合せモデルによる素描は、いかにもラフに過ぎるとはいえ、今日われわれが体験している社会現実、とりわけ個人の成熟困難性の実感や、それとうらはらの切実な成熟希求の思いを、それなりにすくい上げてくれている。そしてこのこと自体が、逆に、「成熟（／未熟）」概念を手がかりにして現代人と現代社会のありようを考察することの有効性を示唆しているようにも思われる。

3. 経済的「自立」の意味

人間の素朴な「生」の形態が何でも自分でしなければならないことを原則とするなら、われわれが生きる社会は、その対極に向かってきたといえよう。この原則を成熟の規準とするなら、上で見たように、現代人は「総未熟者」である。しかし今、こういう意味で成熟を捉えることは現実的ではないだろう。現代人の生の要件としては、働くこと＝賃金を得ることが財を調達する前提であるということが焦点化し、それが「一人前の大人」概念を構成している。もちろん、専業主婦、障害者、失業者、利子生活者などの存在をみてもわかるように、働く機会、働く必要、働く能力が一様であると言っているのではない。しかし、誰かの働き、あるいはかつての自己の働きを前提としてしか、みずからの暮らしは維持できないのは明らかである。この規準は、したがって社会成員の全体を覆うものと観念され、経済的自立が少なくとも「大人になる」ことの基本的指標とされている。

さて、この原理的な経済的自立が、近現代においては高度に発達した労働市場を前提としていることは言うまでもない。見田宗介は、マルクスに依拠しながらこの事情をきわめて明快に叙述する。

資本制システム一般の存立の前提としての、〈労働の抽象化された形式〉は、歴史

的には、「二重の意味で自由な」労働の主体の形成として実現される。

すなわち第一に、労働主体の、伝統的な共同体とその積層による限定と固定性からの解放。——「移動の自由」、「職業選択の自由」、等々。第二には、労働手段との直接の結合からの解離——土地等々、共同体によって保証され、あるいはいっそう原初的には直接に自然によって与えられていた、労働の実現手段から引き離され、市場関係（労働市場における、主体の商品としての売却）という回路をとおしてしか、自己を実現することのできない労働の主体の大量的な創出。（見田 1996：29）

労働市場に投げ込まれてはじめて働くことができる人間。この働きを通して共同体ではない抽象的で大きなシステムに組み込まれる人間。この「労働の主体の大量的な創出」と見田が言う事態こそ、近代の個人化過程の原因であり、また所産でもある。今日の「一人前の大人」の内実を規定する労働の主体とは、このように近代において誕生した構築物なのである。

労働の主体としての大人概念は、したがって社会の側、厳密には経済システムが自己のシステムの営みにとって不可欠な要素である「労働力」を調達するという、経済システムの自己創出過程において捉えられた一つの「人格」（ルーマン）なのである。人格とは、道徳的・倫理的な意味でのそれではなく、大雑把に言えば従来の「役割人間」の概念と類似したものと捉えていいだろう。つまり、経済システムにとっての「環境」たる人間は、「社会というコミュニケーションシステムの営みの再帰性が生み出した構成物」（Luhmann 2002=2004：24）として、すなわちここでは労働者という経済システムが取り込んだ、経験的〈人間〉とは区別された「人格」として、構築されると考えられる。とすれば、見田の「主体」という言葉も、システム論からみれば「人格」と読み替える必要があるし、ここで言う大人とは、このかぎりでは経済システムの要素定義にほかならない。

今日のフリーター、ニートをめぐる議論は、労働市場を通してしか自己を実現することができない「労働の主体（人格）」という社会的規定を受容しないことには、この社会で生きていくことは原理的にできない事実と、深く関わっているはずである。この近代的職業システムを所与のものとしつつも、それへの適応を十全に行えないことは、こうした社会的磁場にあっては「一人前ではない」未熟な存在として眼差されてしまうことになる。非正規労働者から安定した正規労働者へ、自立に向けた就労支援を、といった目標を掲げた諸施策の立ち上げが謳われるのはこのためである。

4. 経済システムの「成熟」と「欲望の主体」

自らの生を安定的に保持するためには、(近代的な意味において)「労働の主体(人格)」にならなければならない。しかし、このことをめぐって青年期の問題がとりざたされているのは何ゆえか。この問題の社会学的核心は「社会化」過程にある。先に述べた「社会は成熟/個人は未熟」、「細分化された労働/自己実現としての消費」という図式に関連づけながら、この問題を考えてみよう。

「成熟」社会は、ある意味、人が自然への適応から社会制度への適応へと生の形を変えることが可能になった社会である。そこでは、社会システムが担う(担ってくれる)機能を当てにして——自らが保有する資質や資源に応じてではあるが——、その享受の仕方・配分をデザインすることが中心的な関心となる。上の両図式の対で示される二項のうちの後者が意味するものは、このことだったのである。このような生の形は、基本的に社会システムへの過剰とも言える依存を前提にするものでありながら、個人はそれを忘却し、社会とのかかわりを、自分の関心に応じてもっぱら「消費」(選択)の自由を行使する場面へと焦点化する構えを身につけることになる。この構えは、もっとも一般的な意味での現代社会における「社会化」の成果だ、と言ってもよいほど、基底的なものであろう。「消費社会」化・「情報社会」化として特徴付けられる現代社会においては、「労働の主体(人格)」になることよりも、「消費の主体」(これも人格と言うべきだが)になることが切実だと考える社会化過程に、個人は晒されると言えば、言いすぎであろうか。

その切実さを「欲望の主体」という視点からとらえる見田は、資本制システムのいっそうの純化された今日の社会を、先の記述と対比させながらこう命題化する。

消費社会としての資本制システム一般の存立の前提としての、〈欲望の抽象化された形式〉は、歴史的には、「二重の意味で自由な」欲望の主体の形成として実現される。

第一に、欲望主体の、伝統的な共同体とその積層による限定と固定性からの解放。第二には、充足手段との直接の結合からの解離——共同体によって保証され、あるいはいっそう原初的には直接に自然によって与えられていた、充足の実現手段から引き離され、市場関係(消費財市場における、対象の商品としての購買)という回路をとおしてしか、自己を充足することのできない欲望の主体の大量的な創出。(見田 1996: 30)

〈情報化/消費化社会〉こそが純粋な資本主義だとした上で、見田はこれを、「人間たち

の自然の欲望と共同体たちの文化の欲望の有限性という、システムにとって外部の前提への依存から脱出し、前提を自ら創出する『自己準拠的』なシステム、自立するシステム」（見田 1996：31）として完成されたものだ、と論じる。本稿の文脈にあえて引き寄せて言うなら、経済システムの「成熟」（完熟？）形態として描くのである。ちなみに先に引用した奥野の文章も、この文脈で語られたものであることが理解されよう。

このような一つのシステムの「成熟」を前にした時、同じ経済システムに回収される「労働の主体（人格）」側は、果たして主体としての積極的な動機付けを自らのうちに内面化していくであろうか。この問いに答えるためには、社会化概念についてさらに理論的に検討しなくてはならない。

5. 社会化・教育・自己社会化

具体的な問いを立ててみよう。〈おたく〉や〈フリーター〉といったライフスタイル（生の形）は、広く教育の成果として見なすことができるであろうか。

ルーマンは、教育システムの機能を「もっぱら個々の人間に今後の人生の準備をさせること、つまり個々の人間の『経歴』に関わる」ものとし（Luhmann 2002=2004：46）、この経歴（キャリアと同義）の意味を「とりわけ、前の段階が後の段階にとって重要だということに他ならない」（Luhmann 2002=2004：84）というふうに捉える。

社会化は、どのような文脈においても進行するが、基本的にその文脈に制限されたままである。これにたいして教育は、他の社会システムで利用できるような結果を追求し、さらにそれを自分の功績にできるという利点をもっている。教育は教育を目的とする行為ではない。教育は他の社会システムにおける人の協同作業を実現するための条件づくりであり、教育において顧慮されているのは、一八世紀以来、おもに職業上のキャリアである。（田中・山名 2004：53より再引）

ここでおさえておきたいことは、従来の社会化論の用語で綴れば、意図的・組織的・予期的・職業的社会化が、教育システムの機能だとしている点である。だとすれば、こうした教育が施されているのにもかかわらず、なぜおたくやフリーターが生まれるのか。経済システム・労働市場との接続問題が第一に問われなくてはならないにしても、ルーマンに言わせれば、それは心的システムの営みとしての社会化の結果だというのである。

教育する側におたくやフリーターになるという結果（アウトプット）を予期したり、そ

うしようとする意図があったとは考えられない。なるほど、学校教育の場に拘束された自分を当の教育現実から救い出すという事情があったかもしれないが、それは教育に期待された機能ではない。教育コミュニケーションから自らを撤退させたり、「いい生徒」を演じたりするのは、教育ではなく、社会化である。なるほど「教育は、社会化の結果として予期されることを補完し、修正するために、用意される」(Luhmann 2002=2004:63)のだが、その「教育システムにおいては、教育と社会化が同時に発生する」(田中・山名 2004:60)という難問を抱え込むことになる。そして、教育は、意図せざる社会化効果によってつねに期待はずれに晒されている。ルーマンは、このように教育と社会化とを厳密に区別する。そして言う。

何よりもまず、社会化はつねに自己社会化なのである。社会化は、あるシステムから別のシステムへ意味パターンが「転移されること」によって生じるのではなく、社会化の基本的過程は、心的システムの自己準拠的再生産なのであり、心的システムがそのシステム自体を拠り所として社会化を引き起こしたり、経験したりしている。そうであるかぎりにおいて社会化は進化に似て(いる:引用者)。(Luhmann 1984=1993:382)

ルーマンの議論の詳細は措くとして、人間が社会規範を内面化することを通して社会的存在として形成されていくプロセスだとする、従来の社会化の一般的定義はここでは廃棄されている。また「社会化は進化に似ている」という視点もルーマンならではのものであろう。このような斬新かつ精緻な議論を踏まえる時、個人の成熟/未熟の問題はどのような形で語りうるのであろうか。

6. 成熟概念は可能か

社会の理想的な成熟状態という観念は、たしかに今もなくなったわけではない。共生・交響のコンミュニオンをその成熟型と考え、あるべき社会のイメージモデルとして渴望する流れもある(見田 2006)。しかし、小集団や一時的なものを越えた全体社会の恒久的なありようとして夢想することはできても、実際にそういう社会を実現することは不可能であるばかりか、全体主義を呼び込む危険性もある(見田 2006:189)。今日の歴史理解に照らしてみるかぎり、そう言わざるをえない。だとするなら、ルーマンの言うように、機能分化によって規定される現代社会において、社会の成熟とはいったいどういうことを意味

していると考えerべきであろうか。答え方は、一様ではない。単なる豊かさや経済成長ではないボガード流の「生活の質」を志向する「成熟」社会のデザイン、「心の豊かさ」「持続可能性」を目指した社会のデザイン……。

成熟という言葉に、そうした「想い」を込めることは意味のないことではないが、社会理論としては、成熟という価値的なものを混入することは慎むべきだろう。あくまで、システムが自己をたえず創出し続けるという営みとして捉えるべきなのだ。成熟という目的論はオートポイエシス・システム論にとっては無用である。ルーマンのシステム論は、そう答えるはずである。そして、このことは同時に、システムとして捉える限り、個人の意識についても適用される。したがって心的システムにおいても、ゴールとしての成熟はないと言うべきであろう。

神が存在しなくなった時、人は神に餓える。価値が不確定になった時、人は価値に餓える。感動が自らの心の中から湧き上がらなくなった時、人は感動に餓える……。それと同じように、成熟という状態がかつてのように人生のシナリオのゴールにあるのだと信じられなくなった時、人は成熟を希求するのだろうか。あるいは、そうした喪失感を擬似物で埋め合わそうとする誘惑を振り切って、失ったままを泰然と生きるべきなのだろうか（Bolz 1996=1997）。

「大きな物語」の解体という言説に象徴される現代社会のありようは、無知の増大、予見不能性に包まれ、リスクや不安を抱え込みながら、ますます「液状化」（Bauman 2000=2001）しているように見える。このようないわゆるポストモダンの状況のもと、現代人は「大量生産された不確実性」（Beck, Giddens & Lash 1994=1997におけるGiddensの言葉：336）に取り囲まれている。現代社会に生きる人の生の形は、これまでの人間が経験してきたものと比べて、格段に複雑かつ不確かなものとなった。そうした確実性の喪失に、人はどのように対応しうるのか。

考えられる理論的視座は、これまで述べてきたことから明らかなように、自己社会化である。ルーマンの社会化論は一見すると心理主義化に連なるものと思われがちだが、けっしてそうではなく、心的システムとして閉じられているがゆえに外部と連結して自己を創出する営みとして捉えられている。とはいえ、「心的システムは、たしかに外部からの要求や期待を受けることを自己変容（生成）の契機としているが、そうして要求や期待に導かれて変わっていくのではない。心的システムは、あくまで心的システム独自のダイナミズムにもとづいて変わっていく」（田中・山名 2004：37）。今日、様々な領域で、教育・指導に代わって、支援・サポートという言葉が用いられていることを想起すべきだろう。

教育（というコミュニケーション・システム）はけっして万能ではなく、最後は心的システムの自己社会化力に依存しているという、当たり前だが、きわめて重要な理論的帰結を、われわれの時代は自覚したと言えるかもしれない。

ただし、今日にあっては「社会化は、持続可能な不確かさの状態にある人生に向けて備えるものでなければならない」（Luhmann 2002=2004：57）とも、ルーマンは言う。

教育すべき若者を、未知のままであり続ける未来に対応できるようにするための教育学が、なければなるまい。……重要なのは、未来が未知であることは一つのリソース、すなわち決定を下す可能性が確保されるための条件だという洞察である。そこから言えるのは、知識の学習が大幅に、決定することの学習（無知の活用）によって置き換わらなければなるまい、ということである。（Luhmann 2002=2004：270-1）

心的システムの営みとしての自己社会化は、不断に襲ってくる不確かさに備え、社会的文脈に応じて自己決定し続けなければならない。そして、そうした心的システムにおいて生じる出来事を、心的システム自身が自己観察する際、成熟／未熟の差異が有効になる可能性はある。

システムは自己観察によって、自らを成熟／未熟の差異として記述することができる。それは、「仮想現実」を構成することだと、ルーマンは言う（Luhmann 2002=2004：277）。心的システムは「成熟／未熟」差異を構成することができるのだが、それはそのシステムに固有のものであって、何を根拠とするかはシステムに委ねられる。心的システムにとっては、そのシステムの環境との相互浸透を通して、心的システムが成熟した環境として内部転写したものを——ちなみに、社会システムにとっては、そのシステムの環境との相互浸透を通して、社会システムが成熟した環境として内部転写したものを——、自らの創出に役立てることになる。

教育はかならず成功をおさめる、と信じる者はいまい。しかし、自己社会化は、進化にも似てひたすら自らの定まらぬ未知に向かって自己記述を企図する営みをやめることはない。成熟／未熟の差異は、とりあえずまだ、そのような仮想現実の虚の焦点として心的システムを照らし出す可能性をもっていると言えよう。

7. おわりに

社会はコミュニケーション・システムであるから、環境としての人間を自らの自己創出

過程のなかに要素として取り込む。その場合の人間は経験的な〈人間〉なのではなく、「人格」である。だからこそ、社会は個々の〈人間〉が死んでも「人格」としての人間を調達しうるかぎり、存続する。その意味で、社会は人間からなるのではないとルーマンは言う。このような社会システムは機能分化というかたちでの進化はする。その場合システムにとって望ましい「人格」が価値的な意味で「成熟」しているかどうかは、関心の外にある。経済的自立という名のもとに「一人前」「大人」になることを要請しているにしても。

一方、〈人間〉にとっても、その望ましい「人格」が〈人間〉の望ましさと直接結びつくことはない。〈人間〉が自らの望ましいありようとして目指す成熟は、成熟／未熟の差異を通して自己観察を行うことによるのみ、これを問題とすることが可能になる。しかし、〈人間〉が自らを成熟／未熟の差異によって記述することを可能にするのは、心的システムが環境との相互浸透を介して自己社会化する営みのなかにあるはずである。心的システムが自然を自らの外部環境として境界づける、まさにそのことが、穀物や果実などが十分にみのあることを、人間の体や心が十分に成育することとして内部転写するのを可能にしているのである。このことは、かりに現代の若者が成熟という観念を持たなくなったとしたら、それは自然や大人や社会という外部を、成熟／未熟差異で捉えることの意味合いの希薄化と無縁ではないことを物語っているのではないだろうか。

不確実性や不定性は、初期近代のリニアな時間概念への信奉を減退させる。そのような社会を成熟したと捉えることは、じつは難しいのではないか。より豊かで、より快適な生の形を実現しているように見える社会にあって、今の若者たちが現実社会に着地することをためらい、他者や社会を前に立ちすくんでいる状況（岩見 2005）は、そのまま、彼ら／彼女らが成熟物語を転写することの困難さを照らし出している。だとすれば、心的システムにとってこの成熟概念を自己創出のために織り込む必然性は、いったいどこに見出されるのであろうか。これに答えるためには、自己社会化論のさらなる検討が必要であることは間違いないとだけ、最後に言っておこう。

引用・参考文献

東浩紀 2001、『動物化するポストモダン』講談社。

Bauman, Zygmunt 2000, *Liquid Modernity*, Polity Press, (=2001、森田典正訳『リキッド・モダニティ—液状化する社会』大月書店)。

Beck, Ulrich 1996, *Risikogesellschaft auf dem Weg in eine andere Moderne*, Suhrkamp Verlag, (=1998 東廉・伊藤美登里訳『危険社会—新しい近代への道』法政大学出版社)。

- Beck, Ulrich / Giddens, Anthony / Lash, Scott 1994, *Reflexive Modernization: Politics, Tradition and Aesthetics in Modern Social Order*, Polity Press, (=1997、松尾精文・小幡正敏・叶堂隆三訳『再帰的近代化—近現代における政治、伝統、美的原理』而立書房)。
- Bolz, Norbert 1997, *Die Sinnengesellschaft*, Econ Verlag, (=1998、村上淳一訳『意味に餓える社会』東京大学出版会)。
- Coleman, John & Hendry, Leo 1999, *The Nature of Adolescence (3rd ed.)*, Routledge, (=2003、白井利明他訳『青年期の本質』ミネルヴァ書房)。
- Giddens, Anthony 1990, *The Consequences of Modernity*, Polity Press (=1993、松尾精文・小幡正敏訳『近代とはいかなる時代か?—モダニティの帰結』而立書房)。
- 1991, *Modernity and Self-Identity: Self and Society in the Late Modern Age*, Polity Press (=2005、秋吉美都・安藤太郎・筒井淳也訳『モダニティと自己アイデンティティ—後期近代における自己と社会』ハーベスト社)。
- 岩見和彦 1998、「現代日本社会の自己認識—現代社会論の射程」大橋昭一編著『21世紀の大学・企業・社会』関西大学出版部、37-58頁。
- 2004、「変貌する学生」絹川正吉・館昭編著『学士課程教育の改革』東信堂、107-125頁。
- 2005、「現代社会と後期青年期問題」『教育社会学研究 第78集』日本教育社会学会、7-23頁。
- Jones, Gill & Wallace, Claire 1992, *Youth, Family and Citizenship*, Open University Press, (=1996、宮本みち子監訳『若者はなぜ大人になれないのか』新評論)。
- 金原瑞人 2004、『大人になれないまま成熟するために』洋泉社。
- 木下清一郎 2001、『心の起源』中央公論新社。
- Luhmann, Niklas 1984, *Soziale Systeme*, Suhrkamp Verlag, (=1993・1995、佐藤勉監訳『社会システム理論 上・下』恒星社厚生閣)。
- 2002, *Das Erziehungssystem der Gesellschaft*, Suhrkamp Verlag, (=2004、村上淳一訳『社会の教育システム』東京大学出版会)。
- 見田宗介 1995、『現代日本の感覚と思想』講談社。
- 1996、『現代社会の理論』岩波書店。
- 2006、『社会学入門』岩波書店。
- 三浦雅士 2001、『青春の終焉』講談社。
- 宮本みち子 2002、『若者が《社会的弱者》に転落する』洋泉社。
- 長山靖生 2003、『若者はなぜ「決められない」か』筑摩書房。
- 仲正昌樹 2003、『「不自由」論—「何でも自己決定」の限界』筑摩書房。
- 奥野卓司 2003「電子メディア時代の大人とは—植物的成熟のすすめ」サントリー不易流行研究所編『大人にならずに成熟する法』中央公論新社、72-94頁。
- 大澤真幸 1996、『虚構の時代の果て』筑摩書房。
- 1998、「自由の牢獄—リベラリズムを越えて」『季刊アステイオン』1998-夏号、TBSブリタニカ、68-99頁。
- 大塚英志 2004、『物語消滅論』角川書店。
- 渋谷望 2003、『魂の労働』青土社。
- 白川静 2003、『常用字解』平凡社。
- 田中智志・山名淳編 2004、『教育人間論のルーマン』勁草書房。
- 鷺田清一 2003「いつでも未熟になれる社会」サントリー不易流行研究所編『大人にならずに成熟する法』中央公論新社、182-200頁。